

# シリア、ハーフィズ・アル＝アサド政権下における “ソフト”な独裁体制維持のメカニズム

——リサ・ウェディーン著『支配の曖昧さ』を中心に——

Lisa Wedeen, *Ambiguities of Domination: Politics, Rhetoric, and Symbols in Contemporary Syria*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1999, xi+244pp.

すな やま こ  
砂 山 その子

## 序

- I 「支配の曖昧さ」
- II 故アサド政権における「シンボリック・パワー」の意義
- III “独裁者”の究極目標

## 序

権威主義体制はいかに維持・強化されるか。この問いは今日の政治学が理論的解明を試みようとしている最大の問題のひとつだといえよう。とりわけ近年、発展途上国の民主化が盛んに議論されるようになって、ある意味で古典的なこの問いは今なお大きな意義を持ちつつけている。またこの問いは、民主主義への移行をいかにすすめていくかという現代的課題に指針を与える可能性をも秘めている。いわゆる権威主義体制の例には事欠かないアラブ世界においても、同一人物が長期にわたって政権の座にしている現象や、その政権下における部分的な政治・経済的開放政策の成果と限界が議論の対象になってきた。本稿で取り上げるシリア・アラブ共和国の故ハーフィズ・アル＝アサド(Hāfīz al-Asad)政権(在任:1970年11月～2000年6月)についても例外ではなく、90年代に「第2次インフィターフ」(infitāḥ: 門戸開放)が本格化したのを機に、権威主義体制の是非や政治的民主化の可能性を取り上げる研究成果が数多く発表された(註1)。

その民主化への転換を期待した世界の目が、今シリアにも向けられている。2000年6月10日、ハーフ

イズ・アル＝アサド大統領の死をもって、その三男バッシャール・アル＝アサド(Bashshār al-Asad)(註2)が政権を引き継ぐことになり、既存の体制の性格やその長期存続の所以を包括的に見直す機会が到来したのである。ハーフィズ・アル＝アサド死去の報道が流れるや否や、人民議会(国会)は臨時総会を招集し、同日中に恒久憲法第83条の改正を可決した。これによって大統領の最低年齢が40歳から34歳に引き下げられ、当時34歳であったバッシャール・アル＝アサドを後任大統領に就任させるための最初のステップが踏み出された。その後のバッシャールの「出馬準備」は目覚ましい速さで実施された。翌11日には、シリアの支配政党であるアラブ社会主義復興党(Hizb al-Ba'th al-'Arabī al-Ishtirākī: 以下、バース党とする)シリア地域指導部(Al-Qiyādah al-Quṭriyah)(註3)の臨時会議でバッシャールの軍における昇進が決定された。これでバッシャールは大將(fariq)に昇進するとともに、軍・武装部隊総司令官(al-qā'id al-'āmm lil-jaysh wa al-qūwāt al-musallahah)に就任し、故アサド大統領が独占してきた軍における最高ポストを獲得した。次いで6月17日から20日にかけて開かれたバース党第9回シリア地域大会(al-mu'tamar al-quṭri)(註4)で中央委員会(Al-Lajnah al-Markaziyah)(註5)書記長に就任し、同24日、バース党シリア地域指導部書記長に選出され党の最高指導者となった。最終的に7月10日の信任投票で97.29%の賛成票を獲得して正式に大統領に選ばれ、名実ともに父アサドの地位を継承し、

シリアの新指導者になった。

バッシャールを後継者に仕立て上げる試みは、故大統領が長男ハスィル・アル・アサド (Basil al-Asad) を自動車事故で亡くした1991年1月以来、着々とすすめられてきた。したがって、バッシャール・アル・アサド現政権は、軍やバアス党をはじめとする国家諸機構だけでなく、シリア国家のイデオロギーの方向性を含めあらゆる意味で、故アサド大統領が残した遺産を基盤として成り立っているといえる。

アサド前大統領政権下におけるシリア政治に関する従来の研究は、バアス党、軍、ムハバーラト (Mukhabarat) などの国家機関に関するもの、あるいは宗派主義 (ta'ifiyah) や地域主義 (iqlimiyah)、部族関係 (asha'iriyah)、縁故関係に基づく人的ネットワークに重点を置くものが中心であった(註1)。以上のようないわば物理的側面もしくは“ハード”面に焦点を当てた先行研究のなかにあって、リサ・ウェディーン (Lisa Wedeen) の本書、

『支配の曖昧さ』(Ambiguities of Domination) は“ソフト”面とでも呼びうる側面に注目している点で異彩を放っている。ウェディーンは権威主義体制の維持および国家による社会の統制や抑圧は、これらの物理的手段が不可欠であることを否定しているのではない。むしろ、これらの物理的側面を補完する「サブ・システム」(p. 27) として、「シンボリック・パワー」(symbolic power: シンボルが生み出す権力) と彼女が定義する権力が機能するメカニズムを明らかにすることを通して、「よりニュアンスに富んだ」(p. 131) 政治の理解を果敢にも目指している。ここでいう「シンボリック・パワー」とは、「表意 (signification) のシステムを操作し、シンボルの世界を支配する」(p. 5) ことによって、指導者に対する国民の服従を獲得する政権の能力を指す。

この「シンボリック・パワー」の分析を行う上で、ウェディーンは政治学と民族学の方法論を駆使し、2年半におよぶフィールド・ワーク (1988～89年、92年、96年夏) をシリアで行っている。資料源は膨大な数のインタビューだけでなく、人々の間に口承で伝わる政治ジョーク、国内全土に散在する記念碑やポスター、公的式典のヒアス、風刺漫画、映画、

テレビ・ドラマなど幅広く、それら個別の分析だけでも興味深い。さらに政権が公の場で駆使用するレトリックについては、国営日刊紙、雑誌、公文書、伝記といった資料の分析を通じて明らかにされている。バアス党政権 (1963年3月～)、とりわけ故アサド政権 (70年11月～2000年6月) 下で発信され続けてきた過去25年間のプロパガンダに逐一目を通し、退屈な決まり文句のなかに時折埋もれている隠されたシグナルを拾い出していくその努力は涙ぐましい。

本稿ではまず、このウェディーンの著書、『支配の曖昧さ』を詳しく紹介する。次に同研究の成果を評価し、自分なりの考察を加えた上で、故アサド政権の権威主義体制の特徴を再考する指針を本書の頁から明らかにする。先に触れたように、バッシャール・アル・アサドが早くも“ハード”面で権力基盤の強化を着々とすすめている今、“ソフト”面に再度注目することは新政権の今後を占う上でも重要な手掛かりとなる。というのも、バッシャール新大統領は「透明性」(shafafiyah) [Al-Ba'ith (Damascus), July 18, 2000] というスローガンのもとに、巧みなシンボル操作を行って現在支配を強化しているからである。また、独裁者個人への崇拜意識を新政権がどのように利用するのか、あるいは崇拜対象がその死をもって残した空白が新政権にどのような障害をもたらすのかといった問いを念頭において、ハーフイズ・アル・アサドの死後初めて明らかになったといえる独裁者の思惑とそれがアサド現政権の方向性をどのように決定づけるのかについて仮説を展開する。

## 1 『支配の曖昧さ』

『支配の曖昧さ』の構成は以下のとおりである。

- 第1章 スペクタクルの信仰
- 第2章 政治の殺害——公的レトリックと許容される発言——
- 第3章 信じる「フリ」をする——Mの話——
- 第4章 反逆の徴候
- 第5章 従順の逆説

第1章で、ハーフィズ・アル＝アサド前大統領に対する個人崇拜現象や「スペクタクルの政治」(politics of spectacle)の意義を解明するにあたってのウェディーン独自の問題意識と仮説が提示されている。「父」(father),「勇敢な騎士」(gallant knight),「第一等の薬剤師」(premier pharmacist),「永遠の指導者」(eternal leader)という形容によって描かれている故アサドのイメージはどこか安っぽく、カリスマ性とは縁遠い。にもかかわらず、体制はこのようなプロパガンダ戦略に巨額の予算を投じて続け、さらに、これらの「スペクタクル」が政治的な威力だけでなく、皮肉にも「反逆行為」(transgression)をも同時に生み出す矛盾さえ引き起こしている。

この投資がどのような効果を期待した政策なのかを、社会科学や人文科学の理論的枠組みが十分に分析できないことを、ウェディーンは物質的利害追求、「正統性」概念、グラムシ的「ヘゲモニー論」などのアプローチに対する批判を通して明らかにしている。さらに、故アサド大統領と西欧の歴史的指導者の比較を通して、シリアにおける現象が帝国主義支配を経て今世紀に新興独立国として出発した国々に特有のものであると述べている。すなわち、既存の共同体とは無関係な線引きによって国境を画定され独立した旧植民地において、人々の共同体への所属意識は、アラブ民族あるいはムスリムといったより大きな集団に向かうベクトルや、宗派、地域、部族などのより小さな集団に向かうベクトルを有するため、国民統合に多大な障害を与える。このような困難な条件下で、新興独立国は国家建設だけでなく国民統合をも実施しなければならず、政権はその一手段として、独裁者個人に対する形式的崇拜の意志表示を国家という共同体の統合概念の基礎とならしめた、とウェディーンは仮定している。政権にとって、「正統性」の獲得に奔走するよりは、むしろ「服従」を基礎にした支配を確立する戦略のほうが、柔軟性と適応性、さらにはコスト・パフォーマンスという点ではるかに大きな報酬が期待できるのである。

第2章では、故アサド大統領の政権下で公的に駆使されてきたレトリックの変遷が紹介されている。1970年代にはバアス党賛美に重点が置かれていたが、

82年のいわゆる「ハマ暴動」とイスラエルのレバノン侵攻を機に大統領個人を崇拜する傾向が強まった。さらに、大統領が心臓発作で執務不能になったのをきっかけに起こった実弟リファート・アル＝アサド(Rifa'at al-Asad)との確執が、政権存続を脅かすまでの危機をもたらした84年以後には、イスラームの修辭に彩られた大統領の神格化が行われるようになった。そして1990年代に入ると、シリア特有のレトリックとして家族観に訴える隠喩表現が大統領の神格化とともに頻用されるようになったことが指摘されている。つまり、公的レトリックに大統領個人だけでなく、その家族、とりわけ母ナイサ・ウスマーン・アブード(Na'isah 'Uthmān 'Abbūd: 1992年死去)と長男バースィル・アル＝アサドまでもがシンボルとして利用されるようになっていったのである。この現象を説明するために、著者はアラブ社会における「家族」の社会学的研究に着想をえて、絶対的権威の象徴としての「父」の存在、さらに「民族」(ummah)を知覚する際にイメージされる「母」(umm)像に注目している。すなわち、著者の解釈によれば、シリアの公的レトリックは、シリア国民一人一人にもっとも馴染みのある権威の象徴としての「父」と大統領のイメージを重ね合わせることによって、支配者と被支配者の間に明確で、しかもある意味で理想的な上下関係をつくり、その「父」を崇拜する「フリをする」(acting as if)者によってのみ形成される共同体を「母」さらには「民族」のイメージに体現させて、「国民国家」への所属意識を強化しようとしているのである。

第3章では、明らかに滑稽な「個人崇拜の対象」(cult)に対する見せかけの「忠誠心」を、なぜ政権はシリア国民に要求するのか、その巧妙なからくりが解明されている。それによると、「正統性」や「ヘゲモニー」論が前提とする本心からの「忠誠心」は、判断や信念という主体的な媒体を通してという意味で、絶対服従、あるいは自我の放棄とはいえない。シリアの政権が国民に求める無条件の服従とは、自らの意思に逆らってでも大統領を崇拜する「フリをする」ことを前提とした国民全体による絶対的な自我の放棄であるため、皮肉にも真の「信仰心」に

根ざしていない。それゆえに、個人の主体性、尊厳、良心を完全に否定し、その結果国民を政治的に無力化するのである。また、その「馬鹿げた」大統領崇拝儀式に全国民を参加させることによって、国民を単なる“被害者”ではなく、大統領の偶像的存在が体現する支配原理を強化する“共犯者”に仕立て上げていく。さらに、他の国民が盲従する様を目の当たりにした個人は、自らの孤独と疎外感を強く意識させられ無力感に苛まれていく。この国民の無力感こそが、独裁政権を支える重要な要素となるわけである。

前章で明らかにされた「フリをする政治」(politics of as if)は、一方では、国民の絶対服従を導き出さうものの、他方では、真の“信仰心”が欠如しているからこそ、「反逆行為」の芽を育てる可能性を内包している。第4章では、この「フリをする政治」という戦略が、いわば副作用として「反逆行為」をも生み出してしまうことが、具体例を挙げて論じられている。その皮肉な結果は、テレビのコメディ番組や風刺漫画、映画、日本語の政治ジョークなどが、公的レトリックに多用される用語そのものを巧妙にもじって、その虚偽を暴き嘲笑することにもっとも端的に現れている。一見すると、この控えめな「反逆行為」は、国民に許された「不満の吐け口」(tanfis) (p. 88)であるように見える。または、より積極的な抵抗運動であるという評価も可能かもしれない。だが、ウェティーンはこれらの二分法的解釈に反対し、「反逆行為」の二面性に着目している。それはシリア政治の活力と抵抗精神が育つ場であると同時に、「反逆行為」そのものすら政権が許容する用語に依拠しているという皮肉な現象である。ルールを設定する権限はあくまでも政権側にあり、そのルールに従ってのみ表現される反抗の試みは、「不本意な服従」の実体を受け入れている印でもあるという「曖昧さ」が見実をもっとも的確に捉える解釈である。そうウェティーンは主張する。

第5章の結論では、まず政権が所有する強制力 (coercion) と「規律的シンボリック・パワー」 (disciplinary symbolic power) (p. 145)の関連を再確認している。権威主義体制を維持するため、

暴力的手段を持ちつづけることは不可欠ではあるものの、常にそれが行使される必要はなく、多くの場合、迫害の恐怖を煽るだけで従属を確保することにたつ。シンボルは国民の強迫観念を生かすのに有効な手段であるという意味で、政権側から見れば、暴力的手段の節約を可能にするという機能を果たしている。本書を通じて政治における服従の論理を分析したウェティーンは、最後に「規律的シンボル」という概念がいわゆる権威主義体制だけでなく、西側資本主義諸国の政治と脱政治化 (depoliticization) を分析するうえでも新しい視点を提供しうることを示唆し、民主主義への無条件な賛美という近年の傾向に対して警告を発している。

## II 故アサド政権における「シンボリック・パワー」の意義

「アサドが強力なのは、その政権が人々に滑稽な言葉を言わしめ、馬鹿馬鹿しい公言を強要できるからである」(p. 12)。「要求される演技が滑稽であればあるほど、政権が大多数の国民に、多くの場合、服従を強要する能力を持つことが一層明白に示される」(p. 147)といった主張に示されるように、ウェティーンは情報の操作や統制によるあらゆる洗脳、身体拘束や拷問による直接的迫害などの手段以外に、大統領の個人崇拝というより低コストな方法で故ハーフイス・アル・アサド政権が被支配者から服従と黙認を獲得してきた様を分析している。第3章で示されているように、政権には国民に公的プロパガンダを信じさせる能力もなければ、またそれが望まれているわけでもない。この点を踏まえると、個人の判断能力や信条に反して、あきれるほど「滑稽な」プロパガンダを言わしめることを通じて、個人の尊厳を傷つけ、その政治的な活力を吸い上げ、ひいては権力への盲従を促そうとするというウェティーンの議論の展開は説得力にあふれる。社会科学は一般にその科学性を追求するあまり、シンボルや心理操作といった人間性に関わる部分に十分な考慮を払えない危険性を内包している。そのなかで、シンボルと権力の相関関係という「支配の曖昧さ」に敢

えて正面から取り組んでいる点が本書の最大の特徴であり、権威主義体制下の政治の駆け引きを理解する上での貢献は計り知れない。

さらに、ウェディーンの著作がシリア一国に関する事例研究を通して、より普遍的な国家論の議論をより深めることに暗に貢献している点も無視できない。すなわち、アサド前大統領の個人崇拜現象が、シリア国家だけでなく、広くは第三世界の新興独立諸国が多かれ少なかれ共有する根本的な矛盾に起因していると捉えられている点である。一方でシリア国家をはじめとするこれらの諸国は、国家機能を拡大し続け、エタティズムと呼ばれる現象を引き起こすほど強力な存在でありながら、同時に歴史的な正統性を欠くという点できわめて弱小な存在でもあるからこそ、指導者の「滑稽な」崇拜が政権の戦略として有効かつ必要となったのである。この点は、国家論の理論的関心のもっとも中心的なものに関わる議論である(98)。

著者の用語でいう「反逆行為」の分析もまた、権威主義体制のもとで庶民は受動的な被支配者に過ぎないという一般に定着したイメージを払拭することに貢献している。「反逆」の試みは一般に政権によって「許容される枠内」(p. 87)でのみ繰り広げられるという限界を明示している一方で、他方ではその枠を少しずつ広げようと努力する被支配者側の活力を評価することを通じて、政治の複雑さを的確に捉えているのである。この政権側と国民の綱引きは実に微妙な現象を生み出しているといえよう。一方で、その控えめな「反逆」は庶民が達成した自己表現の一形態であるが、政権側もまたそれを一定の枠内で許容することによって、民主的なイメージを捏造することができるという点は、本書の視点の延長として注目に値する。

第4章の風刺漫画や政治ジョークに関する事例を見れば明らかなように、もっぱら政権に「許容される枠」内のレトリックを駆使して、さまざまな形で政権批判が行われている。しかしここで対照的に思い起こされるのは、1970年代半ばから80年代初頭にかけて展開された大規模な武装蜂起である。イスラーム勢力が中心となってシリア国内全土で展開され

た反政府運動は、政権の徹底した弾圧にあり、1万5000人とも2万人ともいわれる死者を出した1982年2月から3月にかけてのハマ市の交戦をもって鎮圧された。この時期の反政府運動や政権の対応手段はおおよそウェディーンが描く図とは異なるが、これらの生々しい記憶について残念ながら本書ではほとんど分析されていない。確かにシリアのような権威主義的警察国家において、研究者が反政府活動という政治的に微妙な問題を扱うのは非常に困難であるという事情には一定の理解を示したい。情報不足、政府による研究者個人に対する研究活動の規制など、不利な条件が整っているなかで、とりわけ「ハマ暴動」は、外国人研究者にとってもシリア国民にとっても公に口に出すことすらいまだにはばかれる問題ではある。だが、この時期の反体制運動および政権側の暴力(coercion)の行使に関する考察は、以下3点を取り扱う方法論そのものに関わる重要な問題であることは無視できない。すなわち、第1に強制力と「シンボリック・パワー」はどのように互いに関係しあっているのか、第2に政権に対する国民の不満はいかなる歴史的文脈において「反逆行為」というかたちをとるのか、そして第3にシンボルはいかなる政治的意義をもっているのか、という点である。

ウェディーンは第5章の結論で、「シンボリック・パワー」の有効利用によって、強制力を使う必要が軽減されるとしているが、1970年代末から80年代初頭にかけては、明らかにその機能が十分な効果を生み出せなかった時期といえる。「シンボリック・パワー」はどのような条件下で、服従を強制する機能を果たしうるのか。このような“物理的”弾圧という恐怖の生々しい記憶なくして、後半期のアサド政権は果たして、「シンボリック・パワー」を基礎にした支配を効果的に確立できたであろうか。評者は後者の問いに否と応える。なぜなら、「シンボリック・パワー」の誇示を通して迫害の恐怖を煽るだけでは、服従を確保するには不十分だと考えるからである。この血みどろな武装蜂起の時代に関する分析を「シンボリック・パワー」の文脈で掘り下げることなくしては、シンボル操作の政治的意義を強制力との関

係で的確に捉えることは難しい。さらに、本書は暴力手段を基礎にした支配原理とその「サブ・システム」である「シンボリック・パワー」という2つの手段が故アサド政権を支えてきたかのような印象を与えるが、政権側の反政府勢力に対する対応を細かく分析すると、より複雑な戦略が駆使されてきたことが明らかになる。その政策は暴力的抑圧手段を行使用するだけでなく、時には反政府運動組織内の分裂を促進したり、また時には懐柔して政権側に取り込んでいったりと多岐にわたっている。この点を踏まえると、シンボルの操作は国民の服従を取り付ける戦略の側面に過ぎないことが一層明確にされる。

さらに、第4章の政権批判に関する分析は、シリアに組織的な反体制運動が現時点では存在しないことを前提とした上で、控えて巧妙な「反逆行為」を唯一可能な異議表明方法と位置づけている。しかし、先に述べた1970年代末から80年代初頭にかけての時期に行われた反政府運動は政権の転覆こそ至らなかったものの、対立のすさまじさ、動員者数だけをとっても、高い組織力を持っていたことは明らかである。それゆえ、反政府運動はいつどのような条件下で、ウェディーンという政権に「許容される枠」を越えるのか、すなわち、権威主義体制の発足時期と定着時期、その過程で生まれた支配者と被支配者間の対立とその関係の変化、という時間と経験の要素を加味した上で、「シンボリック・パワー」の理解を深めることが今後の課題として提示されるのである。

むしろ、ウェディーンは時代の変遷に対応したシンボリズムの変化に無関心なのではない。1970年代後半から80年代初頭にかけての武装蜂起に関する言及は、数少ないながらも第2章の前半、公的レトリックの歴史的変遷を分析する箇所に見られる。ところが、この部分の分析は公的レトリックの内容が特定の歴史的事件に対応して、どのように焦点を変えていったかに終始しており、各事件においてシンボルが果たしたか——あるいは果たしえなかった——効力については触れられていない。これはウェディーン自身が本書で貫いている立場、すなわち個人崇拜を主唱する側の意図に注目するのではなく、その

政治的重要性ないしは効力のみが分析可能であり、分析価値がある (pp. 25, 153) という立場に矛盾する。この議論によれば、政治的言語それ自体の分析は、単なる意味論の展開に過ぎず、その政治的意義とは無関係だからである。この矛盾は同様に第2章後半部分で論じられている家族の偶像的崇拜の解釈にも共通している。「父」や「母」の象徴的意味を動員する背景に、それらの存在を通してシリア国民一人一人の意識（あるいは無意識）に訴えかけようとする政権側の「意図」を読みとることはできても、実際にそのメッセージの「滑稽さ」が本意な服従を導き出すのに貢献したか否かを立証することは難しい。以上のようなシンボルの操作が政治的権力に転換される有機的な因果関係こそがシンボル研究の醍醐味といえるならば、その根本的問題意識を深めるために本書が果たした貢献はきわめて大きいのである。

### III “独裁者”の究極目標

権威主義の分析から進んで民主化論を論じようとする読者は、シリアに関するウェディーンの診断に楽観と悲観の双方を見出すことができる。一方で、反政府運動の試みが少しずつ「許容される枠」を拡大しようと模索する新しい動きにある種の期待を抱くかもしれない。他方、権威主義政権が30年という長い歴史を通して、個人の精神的疎外や尊厳の剝奪を戦略として積極的に用いてきたということは、そのような安易な楽観に対して警報を鳴らす。権威主義が暴力的強制力と「シンボリック・パワー」の両方を駆使して体制維持に努めたならば、民主化のプロセスも同様に、言論の自由、身体的自由、選挙の公正、政党結成の自由など“物質”面を保証するだけでは抜け殻に終わるという厳しい現実を本書は提示している。

本書の中心関心のひとつである大統領の個人崇拜という観点から見ると、バシッール・アル・アサドの大統領信任投票の結果が公表された7月11日に指導層が、とりわけ大統領の行き過ぎた賞賛を差し控えることを希望する声明を出したことは注目に

独裁者の死という試練を経験してもなお、(今のところ) 支配体制が安定を保っているシリアの現象に、父から子への「大統領職の世襲」の成功例という単純なレッテルを貼って済ますのは注意を要する。確かに、「大統領職の世襲」の問題は中東の時事問題に関心を寄せる専門家やメディアに近年多くの話題を提供してきた。エジプト、イエメン、イラク(注9)などの共和国大統領らが、それぞれ息子への権力移譲準備を整えているという噂が絶えないなかで、中東の共和国としては初めて大統領職を世襲したシリアが注目されるのは、きわめて当然のことであろう。しかし、シリアの例に性急に普遍的なトレンドを見出す前に、前世代の独裁の形態を再考し、他の例への適用可能性あるいは個別性を十分に検討する必要がある。

目に代表される国家の基本原則が後にケマリズムとして知られるようになるに至って、その存在は国家の存続と一体化されることを通して、不死の人物となったのである。

アラン・リチャーズ (Alan Richards) とジョン・ウォーターベリー (John Waterbury) は、アタテュルクが建国したトルコ共和国のイデオロギー的基盤が中東におけるその他の新興独立諸国に国家建設のモデルを提供したと指摘している。

過去30年以上にわたって、中東地域に生まれた社会的なイデオロギーにはいくつかの共通のテーマがあった。それらのいずれもが、アタテュルクとトルコ共和国の6原則に類似しているか、ないしはその直接的な引用ですらあった。国力とは、強い経済と軍勢力を楯とした帝国主義支配からの解放と解釈され、それは目標であると同時に、約束ごとでもあった。これに次ぐ教義は、市民の形成と市民権に対する新しい意識の醸成であった。それは外国による支配に終止符を打つとともに、国内の抑圧者、すなわち「外国と結託する——引用者」買弁実業家を駆逐してはじめて実現できるものとされた。この立場によれば、識字率の向上、公共保健衛生システムの充実、そしてにわか景気の計画経済によって、国民の物理的ニーズは満たされ、各個人は尊厳と自己の価値を再認識する。精神的ニーズについては、大衆政党がナショナリズムと市民の義務について新世代を教育することを通して解決される。ありとあらゆる政権が経済成長の恩恵を公平に分配することに傾倒し、あるものはこれを社会主義と呼んだ[Richards and Waterbury 1990, 347]。

代々のシリアのバース党政権はまさにこれを社会主義と命名した典型例であった。仮にリチャーズとウォーターベリーのいうようにバース党のイデオロギーと政策がトルコ共和国のケマリズムに指針をえていたならば、バース党の理念に深く傾倒し、党内の権力闘争における最終的勝者として政権を奪取したハーフイズ・アル＝アサド大統領がアタテュルク

個人の政治的手腕に何らかのモデルを見出したとしても驚くにあたらない。

ここでアタテュルクとシリアのアサド前大統領を比較して、アタテュルク信仰もまた「滑稽さ」を武器に権力誇示をはかった政策の産物であると結論付けているのでは必ずしもない。しかもアタテュルクとは異なりハーフィズ・アル＝アサド大統領は文字通りの“建国の父”ではない。しかし、このような相違点はよそに、イスラエル人シリア研究者モシェ・マオズ (Moshe Ma'oz) の言葉を借りれば、「アサド大統領の指導下で、シリアは弱体で、不安定な、壊れやすい国から、明らかに強く安定した中東の地域的パワーに生まれ変わった」(Ma'oz 1986, 9) ことは無視できない。“度重なるクーデターに苛まれ、近隣諸国の陰謀に惑わされた1960年代までの歴史に別れを告げた新生シリアの父”というイメージこそ、故アサド大統領が国内外に植え付けようとしたものであった。現代シリア研究の第一人者のひとりであるパトリック・シーラ (Patrick Seale) は、1988年出版の大統領の伝記『アサド：中東の謀略戦』で、「アサドの政権はきわめて個人色が強い」と述べた上で、政府のあらゆる機能が大統領個人の手に集中していたと指摘している (Seale 1988, 494)。このような機能面だけでなく、アラブ・ナショナリズムをはじめとするシリア国家の意義づけを30年間独占した故アサド大統領は、現シリア国家の存在意義と国家建設を個人の功績と結びつけて再定義した。今日のシリアがバクシャール体制のもとであれ、別の政治勢力のもとであれ、現在のような地域的パワーとして安定を維持しうるかどうか現時点では不明である。にもかかわらず、バクシャール体制の存続にアサド前大統領の残した成果が不可欠であることは新政権のスローガンのひとつか、父ハーフーズ・アル＝アサドの歩んだ「路線の継続性」(istimrāriyat al-nahj) と表されていることから明らかである。前大統領はシリア国家の存続基盤を定義する存在として国家そのものと一体化し、自らを——アタテュルクのように——不朽の存在に仕立てようとした。

このような推論に過ぎない議論の展開に対して、ウェディーンならば非学術的なと肩を吊り上げるか

もしれない。前述したとおり、彼女は大統領の偶像的個人崇拜を分析する上で、指導者側の意図は決して「答えが出ることがない」(p. 153) 問題として積極的に切り捨てなければ、その政治的役割あるいは効力を的確に捉えることはできないという立場をとるからである。しかし、見せかけの信仰や服従を強調するウェディーンの説は、アサド前大統領の偶像的存在がその死後も政治的に利用され続けているという現象に対して有効な説明を加えられるのであろうか。信仰心を伴わない崇拜は、その場限りに終わるのが常ではないのか。議論の展開上、特定のシンボルを操作する指導者側の意図を分析外におくことが、そのシンボルの政治的効力を理解するためには方法論上不可欠でありながら、実はその排除によって肝心の政治的効果自体を見誤りがねないという根本的なジレンマを解消することこそ、シンボル研究の今後の課題であるのは明らかである。

この難題を意識しながら、最後に敢えて「答えが出ることがない」問いに仮説を加えてみたい。独裁者の究極の望みとは何であろうか。生きている限り政権を維持することで権力欲を満たす、あるいは死後親族を後継者の座に据えることで満足する者もいるかもしれない。だが、それを保証できると確信した時には、さらに死後もなお、自らが支配した国にとって不可欠な存在として“生き続ける”存在になることを望むのは不自然ではあるまい。アサド前大統領もまたアタテュルク同様、国民の「父」という表現を好んで使用したのは、ウェディーンのいう「滑稽さ」の戦略だけでは必ずしもなく、このような独裁者の究極の目的ゆえだったと仮定できる。もし、これを“アタテュルク現象”と呼んでみるならば、ハーフィズ・アル＝アサドに対して頻用されてきたタイトル「我らが永遠の指導者」(qā'id nā ila al-abad) は、満更單なる「滑稽な」レトリックではなかったのかもしれない。今後バクシャール・アル＝アサド新大統領の政治における前大統領の偶像の除を分析する上でも、また他のアラブ諸国における「大統領職の世襲」の可能性を占う上でも、前時代の独裁の形態は無視できない要素であり続ける。



(注1) 「第2次インフィターフ」についての代表的研究には、Kienle(1994)がある。1990年代の政治改革については、青山(1998)を参照。

(注2) ハーフイズ・アル＝アサドは妻アニーサ・マフルーフ (Anisah Makhluḥ) との間に一女四男、ブシュラー (Bushrā al-Asad: 1960年生まれ)、バースィル (1962～1994年)、バッシュアール (1964年生まれ)、マジド (Majid al-Asad: 1967年生まれ)、マール・ヒル (Māhir al-Asad: 1968年生まれ) をもうけた。

(注3) シリア・バアス党の最高意志決定機関で、21名の党幹部によって構成される。

(注4) シリア・バアス党の政治・経済・組織方針を審議・決定し、地域指導部、中央委員会、検閲査察委員会を選出する場。

(注5) シリア・バアス党の地域大会が休会中にその執務を代行する機関で90名の党员から構成される。

(注6) 内務省、軍、バアス党の管轄下にある諜報機関、秘密警察組織、武装治安部隊の総称。

(注7) Hinnebusch (1990) 参照。宗派主義の視点からシリア政治の分析を試みた代表例には、Van Dam (1996)がある。経済的階級に焦点を当てたものとしては、Perthes(1995)がある。Middle East Watch(1991)は、シリア国内の政治的社会的抑圧、人権侵害を糾弾している。最近の研究例の代表作には、Batatu (1999)、Zisser (2001) がある。

(注8) アラブ国家のこの矛盾を正面から扱った重要な貢献として、Ayubi(1995)がある。タイトルの“Over-stating”には二重の意味がこめられており、まさに物理的な意味での「国家の肥大化」を表すと同時に、国家の真の弱体性を無視してその力と存在を「過大評価」することの危険性を示唆している。詳しい議論については同書の3ページを参照。

(注9) イラクにおける「シンボリック・パワー」の研究についてはウェティーンの著書にも言及されているが (pp. 28-29, 77-79)、残念ながらシリアの事例との比較は表面的なものに終わっている。イラクの代表的研究例としては、Makiya (1991) が挙げられる。

## 文献リスト

### ＜日本語文献＞

青山弘之 1998. 「もう一つの和平交渉!?——1990年代のアル＝アサド政権とシリア・ムスリム同胞団——」『現代の中東』25.

### ＜外国語文献＞

- Ayubi, Nazih N. 1995. *Over-stating the Arab State: Politics and Society in the Middle East*. London and New York: I. B. Tauris.
- Batatu, Hanna 1999. *Syria's Peasantry, and the Descendants of Its Lesser Rural Notables*. Princeton: Princeton University Press.
- Van Dam, Nikolaos 1996. *The Struggle for Power in Syria: Politics and Society under Asad and the Ba'th Party*. London and New York: I. B. Tauris.
- Hinnebusch, Raymond A. 1990. *Authoritarian Power and State Formation in Ba'thist Syria: Army, Party, and Peasant*. Boulder: Westview.
- Kienle, Eberhard ed. 1994. *Contemporary Syria: Liberalization between Cold War and Cold Peace*. London: British Academy Press.
- Makiya, Kanan (Samir al-Khalil) 1991. *The Monument: Art, Vulgarly and Responsibility in Iraq*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Ma'oz, Moshe 1986. "The Emergence of Modern Syria." In *Syria under Assad: Domestic Constraints and Regional Risks*, eds. Moshe Ma'oz and Avner Yaniv. London and Sydney: Croom Helm.
- Middle East Watch 1991. *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime*. New Haven and London: Yale University Press.
- Perthes, Volker 1995. *The Political Economy of*

